人生は野菜スープ

片岡義男

人生は野菜スープ

片岡義男

角川書店

人生は野菜スープ

昭和五十二年十二月十日　初版発行
昭和五十五年五月三十日　五版発行

著　者　片岡義男

発行者　角川春樹

発行所　株式会社角川書店
東京都千代田区富士見二ノ十三ノ三　郵便番号一〇二
振替東京三一一九五二〇八　電話（03）二六五―七一一一

印刷所　新興印刷株式会社

製本所　株式会社宮田製本所

落丁・乱丁本はお取り替えいたします
0093-872202-0946(0)

◆目次◆

人生は野菜スープ　三
貸し傘(がさ)あります　六三
馬鹿が惚(ほ)れちゃう　一二九
給料日　二〇一
初出誌一覧

カバー・表紙・扉
写真提供　中道順詩

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook

人生は野菜スープ

眠っていた。ふと気がつき、目をあけ、スクリーンを見た。シネマスコープの画面いっぱいに、キッスのシーンだった。

主人公のロサンゼルスの私服刑事が、娼婦のような半裸の女を抱いている。薄暗くした部屋のなかで、ふたりは立って抱きあっている。

かさなっていた唇がはなれ、女が頭をうしろにひいてなにか喋ろうとするとき、カメラは部屋の片隅にカットする。

分厚いカーテンのかげから男が半身を出し、両手で強力そうなピストルを構えている。慎重に狙い、引金をひく。スクリーンにむきあっている観客にむかって、ズーム・アップしたピストルが発射される。

カットが、かわる。私服刑事の抱いていた女の頭に弾丸が当たり、一瞬、スクリーンぜんたいが、まっ赤になる。

女の頭は、ぐちゃぐちゃにくだかれてふっとび、刑事の上半身は血まみれになる。顔に血しぶきをたっぷり浴びる。

すでに死んでいるその女を抱きとめたまま、刑事は自分のピストルを抜く。たてつづけに射ち、女を

突きとばしてフロアに身を投げる。刑事の顔がアップになる。頬のあたりにはりついていた女の顔の肉片を彼は左手ではぎとり、すてる。

守田志郎は、あくびをした。首を左右に振り、席を立った。

ふりかえり、まばらに客のいる館内をながめた。通路に出て、かさなりあう銃声をうしろに聞きつつ、わきのドアから外に出た。

外に出て志郎はまたあくびをした。女性用のトイレが突き当たりにある、幅の広いロビーのようなスペースだった。壁にポスターが何枚か貼ってあり、赤いビニール・レザー張りの長椅子がいくつか置いてあった。

がらんとしていた。トイレとは反対の、二階正面のロビーにむかって歩きはじめた志郎は、左側の壁にそって置いてある長椅子に女性がひとりすわっているのを見た。

若い女性だった。歩いてくる志郎に、女はひょいと顔をあげた。きれいな顔だった。

長椅子のひじかけに背をもたせかけ、ひざまでのスカートにくるまれた両脚を長椅子のうえにそろえて投げ出していた。ヒールのほとんどない、黒い靴をはいていた。

女の左側の手もとには、小さな四角いテーブルがひきよせてあった。灰皿をのせ、ロビーのあちこちに配置してあるテーブルだ。

そのテーブルのうえに、マニキュアのための道具やエナメルの小瓶が、いっぱいにひろげて置いてあった。

女は、右手の爪を、小さなナイフのようなもので手入れしていた。

ゆっくり歩いてきた志郎は、女と目が合った。とたんに、志郎は、にっと笑った。

なにさ、とでも言いたげな表情を唇の両はじにうかべ、彼女は視線を自分の右手の爪にかえした。

女のわきを、志郎は、ゆっくり歩いていった。
まっすぐに歩いていくと、ガラス煉瓦のいちめんにはまった壁だった。
壁のそばに立って、守田志郎は両手をジーンズのポケットにつっこんだ。ガラス煉瓦は、ながいあいだ掃除されていないらしく、薄よごれていた。
そのガラス煉瓦をとおして、眼下に新宿歌舞伎町の一角を見おろすことができた。
明るい陽の照る初夏の午後だった。うしろのドアのむこうから、まだ銃声が聞こえていた。
眼下の街を歩いている人たちをガラス煉瓦ごしにしばらくながめたあと、白いTシャツの下から手を入れて腹のあたりを軽くかきながら、ロビーのまんなかにある売店にむかって志郎は歩いた。
売店には、おばさんがふたりいた。ふたりとも、明らかに退屈していた。
志郎は、ポップコーンをひと袋、買った。
売店のむこうに、壁に寄せて自動販売機がいくつかならんでいた。
カン入りのドクタ・ペパーをふたつ、志郎は買った。
「空きカンはゴミ箱にすててくださいね、おにいさん」
売店のおばさんが退屈まぎれにそう言った。
ドアのうえの壁に、かつてのハリウッドのスターたちの大きな白黒写真が額に入れてかけてあった。
若いゲーリー・クーパーやクラーク・ゲーブルが、がらんとしてさびしい二階ロビーを見おろしていた。
女のいる長椅子まで、志郎はゆっくりひきかえした。
そろえて投げだしている女の両脚のむこうに、ひとりが腰をおろせるだけのスペースがのこっていた。
志郎はそこに腰をおろした。

女が顔をあげ、志郎を見ていた。また、ふたりの目が合った。
さきほどとおなじように、志郎は、にっと笑った。
「退屈な映画なんだよ」
と、志郎が言った。屈託のない、人なつっこい喋り方だった。
「あたしだって、つまらない女よ」
軽くみじかく、志郎は笑った。
「そうは見えない」
「なによ。それで口説いてるつもり？」
かわいらしい声だった。
女の顔が、笑わずにじっと、志郎を見ていた。
長椅子におろした腰を浅くし、志郎は両脚を投げだした。よごれた白いスニーカーを素足にはいていた。
「飲む？」
志郎は、ドクタ・ペパーのカンをひとつ、女にさしだした。
間をおいて、こくんとひとつ、彼女はうなずいた。
「三分の一くらいならね」
「じゃ、こっちだ」
志郎は、もうひとつのほうをさしだした。
「こっちは、三分の一しか入ってないんだ」
女は、黙っていた。そろえて投げ出した両脚は、そのままだった。なんの飾りもない、平凡なスカー

トをはいていた。微妙な直線を利用した柄が、こっていると言えば言えた。地味なものだった。
志郎は、リングを指さきでおこし、指をかけてひき裂くようにあけ、女に渡し、さらに、ポップコーンの袋をあけた。
「つまむ？」
「つままない」
また、志郎は、にっと笑った。肉のない、やせた顔は、これといって目立った特徴もない、二十六歳の男の顔だった。鼻の下に、「八」の字にヒゲが生えかけていた。
女は、マニキュアの刷毛をまた手にとった。志郎のことなど、まったく無視していた。
志郎はポップコーンを口に入れ、噛み、ドクタ・ペパーでながしこんだ。
白くて丸くふくらんだポップコーンがひとつ、フロアに落ちた。
「ひろってよ」
と、彼女が言った。
「気になるの。なにか落ちてると」
ひろった志郎は、むかい側の壁に寄せて置いてあるテーブルの灰皿に、それをすててきた。
ひとしきり志郎はポップコーンを食べ、ドクタ・ペパーを半分ほど飲んだ。
女は、ドクタ・ペパーに手をつけなかった。
志郎は、ジーンズの尻のポケットから、セブンスターとマッチをとりだした。
「喫う？」
と、女にきいてみた。
「サービスいいわねえ」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook

うつむいたまま、女がこたえた。
「気味わるいわ。でも、喫いたいんだけど」
「喫えよ」
「だめなの。エナメルのうえに灰が落ちると、台なしになるから」
志郎は、一本くわえて火をつけた。
煙を吐きだし、また腰を浅くして両脚を投げ出し、天井を見た。
しばらくして、女が上体を志郎のほうにかたむけた。
「ねえ。ひと口」
そう言われて、とっさに志郎はなんのことなのかわからなかった。
女の顔を見ると、顔をこちらへ突き出し、ピンクにくっきりと塗った唇をすぼめていた。
煙草のなかほどを持ち、志郎は吸口を彼女の唇にちかづけた。
ピンクの唇が吸口をくわえこみ、紅をさした両の頬がすぼんだ。煙草の火が、吸口にむかって、すこし進んだ。
女は吸口をはなし、上体をもとにかえした。煙を吐き出し、
「ありがとう」
と言った。
白い吸口に、うっすらとピンクの口紅がのこった。
女が顔をあげた。
「あら、ついた？」
と、目をくりくりさせた。

「すこしな。いいんだよ」
「ごめんね」
はじめて、女が笑顔を見せた。
すこしのこっているドクタ・ペパーのカンに、喫いおえた煙草を落とした。
カンをフロアに置き、志郎はぐったりと細身の体をながくし、天井をあおいだ。
ふわあっ、とアクビをし、うなじのなかばあたりまで届いている長い髪を両手でかきあげた。
「なんなの、今日は。休み？」
「うん」
女はそれっきり黙った。
「毎日、休み」
「ふうん」
会話は、またとぎれた。
「学生、じゃないわね」
「ちがう」
顔をあげ、女は志郎を見た。
不思議そうにみじかく笑い、
「なんなのよ。あなたのほうから、話しかけてきたのに」
こたえるまえに、志郎はまたアクビをした。
「眠いの？」
「うん」

「マージャン？」
「ちがうんだ。朝早くに目をさます習慣がついてて。今朝も七時に目がさめた」
女の丸い目が、キラと光った。唇が笑った。
「あら、あたしも。アパートのすぐ裏が、八幡さまなの。境内でラジオ体操なのよ。今日からはじまったの。夏休みなのよね」
エナメルの刷毛を置き、ドクタ・ペパーのカンを持ちあげ、すこし飲んだ。
「眠いのにさあ。拡声器で、ガンガン。第三の体操、脚をひらいて両手を腰にあてえ、ときちゃうのよ」
「体操、やってみるかな」
志郎が立ちあがった。
両足をそろえてまっすぐに立ち、上体を前に倒した。ひざを折らずに、両手をべったりとフロアにつくことができた。
「だいじょうぶだ」
志郎は長椅子にもどって、すわった。
「それで終りなの？」
「うん」
「へんなの」
「両手がつけばいいんだ」
「老化してないのね」
「そう」

会話は、そこでまた、とぎれた。
女は黙ってマニキュアに熱中し、志郎は、その作業を見るともなくながめた。
しばらくして、志郎は、立ちあがった。そして、のびをした。
女は、両手のマニキュアを終っていた。こんどは足指にエナメルを塗るつもりらしく、スカートを両脚に巻きつけなおし、靴を両方とも脱ぎ、両足を長椅子にあげた。
両ひざを抱くようにして、女は、かがみこんだ。
「ねえ」
女が、言った。
「うん？」
顔をあげ、志郎をまともに見て、女は平気な顔でこう言った。
「あなた、あたしと寝たい？」
「寝たい」
反射的にとび出てきた返答だった。こたえてから、志郎はいささかうろたえた。
「正直ね」
「ウソつくのをやめたら、毎日、休みになってしまった」
「遊ぶのは、いつも新宿？」
「まあ、ね」
「アリスって店、知ってる？」
名前だけいきなり言われても、わからない。
「さあ」

女は、その『アリス』という店の場所を説明した。
「わかりやすいとこよ」
「わかると思う」
「ひまなら、あとでまた逢おうよ」
「ひまだよ」
「じゃ」
「何時ごろ」
「そうね、七時すぎ」
志郎は、うなずいた。
自分が飲んだドクタ・ペパーのカンとポップコーンの袋を持ち、女にむかってにっと微笑し、ロビーの正面へ歩いていった。女は、顔をあげなかった。
ドクタ・ペパーのカンをゴミ箱にすて、ポップコーンだけ持ち、志郎は一階へ降りた。人のいない広い階段を降りながら、
負けた、負けた、体よく追っ払われた
と、志郎は思っていた。
あたしと寝たい？　と、いきなりきいておどかしておき、あとで逢おうよと、適当に店の名を言ったにちがいない。
負けてもともと。
明るい夏の昼間にむかって目を細め、志郎は閑散とした映画館を出ていった。

*

石だたみのせまい道が、半円を描いて小路になっていた。両側には、バーや飲み屋がぎっしりとならんでいた。小さなビルもあった。ビルのどの階からも酒場の看板が突き出ていた。小路の両側の店の壁からはクーラーが尻を出し、低くうなっていた。

白くて細い五階建てのビルの三階に、『アリス』という名の店を見つけたのは、七時十分すぎごろだったろう。志郎は時計を持っていないので、正確な時間はわからなかった。

せまい急な階段があった。エレベーターもあった。大人がふたり乗ればいっぱいになるような、かわいいエレベーターだった。

志郎は、そのエレベーターで三階まであがった。ポップコーンの袋を、まだ持っていた。なかみは、のこりすくなくなっていた。

白いドアに小さな赤い字で『アリス』と読めた。ドアを押し、志郎はなかに入った。

入ると左側が「コ」の字型にカウンター。右側の壁に沿ってベンチ・シートがあり、つきあたりにはジュークボックスが置いてあった。むかいの壁にもベンチ・シートが寄せてあった。

カウンターのなかに、若いバーテンがひとりいた。無言で志郎を見た。

「待ち合わせなので」

と、志郎が言った。

バーテンは、黙って顎をしゃくった。

ジュークボックスが鳴りはじめた。演歌だった。テナー・サックスと男のコーラスが、もつれ合った。

つきあたりの壁に寄せたシートにすわり、志郎は、ぼうっとしていた。バーテンは口をきかなかった。

カウンターのはじにつんである灰皿をひとつとったついでに、志郎は水割りを注文した。煙草を喫い、水割りをすすり、ポップコーンをひとつずつ食べて、志郎は待った。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook